



TITLE:

# 徳川時代の藩営専賣論

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

---

CITATION:

堀江, 保藏. 徳川時代の藩営専賣論. 經濟論叢 1930, 31(4): 578-594

ISSUE DATE:

1930-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129938>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十一卷 第四號

昭和五年十月一日發行

## 論 叢

戶數割に於ける矛盾 . . . . . 法學博士 神戸 正雄  
米國文化社會學 . . . . . 文學博士 米田 庄太郎

## 說 苑

世界商品價格の決定 . . . . . 經濟學博士 作田 莊一  
歸屬理論の一考察 . . . . . 經濟學士 柴 田 敬  
獨逸舊稅制の崩壞と財政調整法 . . . . . 經濟學士 中川 與之助  
德川時代の藩營專賣論 . . . . . 經濟學士 堀江 保藏

## 雜 錄

戶數割に於ける資産狀況に依る資力算定方法 . . . . . 經濟學士 安田 元七  
信用及信用組織 . . . . . 經濟學士 中 谷 實  
經濟學全集「統計學」を讀む . . . . . 經濟學士 蜷 川 虎三

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 徳川時代の藩營專賣論

堀 江 保 藏

### 一 序 言

徳川時代、今日の專賣に類似の制度が多く、藩に於て行はれた。此の制度は、領内の産物を藩自ら獨占的に購買し、領内又は領外に輸出し以て商業利潤に均霑せんとするものである。領内限りの專賣はいはゞ消費税賦課の一形式に過ぎざるものであるが、領外輸出に至つては積極的に商業利潤の獲得を目的とするものであつて、諸侯の商人化の傾向は前者に比してより濃厚なりといはねばならぬ。徳川中期以後、交通發達して地方物産の領外に於ける販路開くるに及び、諸藩は所謂國産の増加を計ると共に、自らその領外輸出を行ふ事となつた。従つて中期以後の專賣に於ては此の意味のものが大部分を占め、而も瀬戸内海を環る地方に多かつた。蓋し貨物の最大集散地なる大阪に對する經濟上交通上の關係を考ふるならば自ら諒解し得るところであらう。

諸藩に於て專賣制度の行はるゝに至りし原因は、主として財政の窮乏にある。幕府に於けると同様、諸藩財政の窮乏が主として米遣經濟と、進展し來れる貨幣經濟との矛盾に基くものなる事は詳論を要せざるところである。貨幣經濟の進展は即ち町人階級の勃興を意味する。諸藩は財政の窮乏を感ずるや、その身分的政治的支配權によつて、勃興し來れる町人を利用し又は排除して

交換經濟上に於ける利益の割込或は全收を企圖するに至つた。最初は町人階級に特權を與へてその生業を保護すると同時に、運上或は冥加金を課する程度に止つたが、後には町人階級が莫大なる商業利潤を獨占するを羨み、自ら賣買行爲に携はり、且つその利益を確保する爲めに、その取扱ふ商品の民間に於ける自由賣買を禁ずるに至つた。之れ即ち藩營專賣仕法である。蓋し鑄貨の權なき諸侯の財政政策としては、米を基礎とする封建的財政組織を改めざる限り、專賣仕法は藩札の發行と共に有力なる手段たりしことを疑ふ餘地がない。

此の制度は只に財政上資する所大なりしのみならず、國產の販路を擴張し確實にする事によつて、産業隆興の有力なる原因となりし場合が少くない。然し財政上の顧慮に偏し利潤の獲得を專らとするに及んでは、民業を壓迫して生産力を減退せしめ、従つて得べき利益の減少を見る事となつた例も少からず存する。極度の民業壓迫の結果、一揆の勃發を見た例も少からざる事は、既に黒正博士によつて明かにせられた所である。

專賣制度は右の如く財政政策上、産業政策上重要な地位を占めたものであるから、徳川時代に於ても各種の立場からその可否を論ずるものがあつた。本稿に於ては夫等論者の意見を考へ、併せて專賣制度の輪廓を明瞭にすべき一材料に供したいと思ふ。尤も專賣制度に關する意見としては、佐藤信淵の米の國家專賣論、或は同じく米の國家專賣を主張せる「收米權上書」<sup>1)</sup>の如きものもある。然し本稿は藩營專賣論に關するものであり、且つ佐藤信淵の論については口田康信氏の研究<sup>2)</sup>もあるから、此處には觸れない事とする。

1) 日本經濟叢書、卷三十三、所收  
2) 佐藤信淵の富國策に就て(社會科學、第二卷七號)

## 二 專賣獎勵に關する意見

一 太宰春臺 諸藩の專賣に就て比較的早く論じたものは、太宰春臺であらう。春臺は享保十四年に大著「經濟錄」を著し、次で「經濟錄拾遺」を公にした。專賣に關する意見は後者に於て見らるゝ所である。

本書は諸藩の財政救済策を説けるものであつて、先づ貨幣經濟の發達の狀況を敍し、『今の世は、祿ある士大夫も、國君も皆商賈の如く、偏に金銀にて、萬事用を足す故に、如何にもして金銀を手に入るゝ計を爲す、是今の急務と見ゆるなり、金銀を手に入るゝ術は、賣買より近きことなし<sup>1)</sup>』と商業利潤の大いなる事を説き、進んで、『當代にも昔より賣買にて國用を足し、祿食に代ふる國あり、對馬侯は小國を領して、僅二萬餘石の祿なるが、朝鮮人參其の他諸の貨物を、甚だ賤く買入れ、一國にて占めて、甚だ高く賣り出す故に、二十萬石の諸侯に比して猶餘裕あり<sup>2)</sup>』と述べてゐる。これ對馬藩の朝鮮貿易獨占であつて、同藩士賀島兵介の上書(貞享四年?)にも『朝鮮御商賣之利と、御國基肄・養父之御物成とを入れ、毎年貳千五百貫目程宛有之候へば、凡十貳萬石程の御所務に當り候故<sup>3)</sup>』云々とある如く、莫大なる利益ありしものである。かくの如き外國貿易を獨占するものに尙松前・薩摩の兩藩が舉げられてゐる。而て春臺は、外國貨物のみならず、領内産物を專賣する事によつても利益の少からざる事を説き、津和野・濱田兩藩の紙專賣、新宮藩の國產專賣を舉げてゐる。最後のものに就て曰く『新宮侯は紀州の上郷にて、三萬石の祿なるが熊

1) 日本經濟叢書、卷六、291頁

2) 同上

3) 日本經濟叢書、卷廿六、4頁

野の山海物産を占めて賣り出して、富士萬石に比すといふ<sup>4)</sup>と。されば『土地の宜に従ひて、百穀の外、木にても草にても、用に立つべきものを植ゑて、土物の多く出るやうにすべし、又國民に宜しき細工を教て、農業のひまに、何にても人間の用に立つべきものを作り出さじめて、他國と交易して、國用を足すべし、是國を富ます術<sup>5)</sup>』であると説いてゐる。

領内産物の專賣は、右の如き財政上の利益あるのみならず、之を行ふ事によつて苛酷な運上を課する必要がなくなり、從て領民を苦しめて政治上の問題の惹起するを豫め防止する事が出来る。即ち曰く『凡諸國にて運上ある程の貨物は、民の心に、領主には定りたる祿秩ありて、租税を取るは勿論なるに、其外に民間より出づる土産貨物に、又征税を出すは、非理なることのやうに思ひて、或は運上を難澁し、或は其物産の中にて、惡しき品を運上に出して、良き品をば他所の商人に賣ることあり、其事實發覺すれば、有司之を責めて、其姦を禁せんとする故に、罪人出來て、是亦民の愁苦となる、運上にはケ様の弊あり、(中略)今若し領主より金を出して、國內の物産を買ひ取り、民の從來私に賣るよりも利多きやうにせば、民必ず之を便利と思ひて喜ぶべし<sup>6)</sup>』と。此の言葉の内に封建制度の財政組織の基礎が最も簡明に言表はされてゐる。即ち領主の財政は一定額の貢米を以て立つるのが本則であり、運上を課する事は一種の掠奪行爲である。されば民より奪はずして而も國庫を充實さす手段は、商業利潤の獲得に若くはない、といふのである。專賣制度は又領民に對しても積極的に次の如き利益がある。若し生産者各自が市場に搬出するとすれば旅費がかゝり、問屋或は牙僧に口錢を支拂はねばならぬ、又若し集買に來る商人に賣渡

4). 5) 同上、卷六、292頁

6) 同上、294、295頁

すどすれば、商人は旅費・手數料を見積るが故に價格は勢ひ低からざるを得ない。何れにしても生産者は所期の利益を擧ぐる事は出来ないのである。されば領主が買上を行ひ、『民に坐ら他所の商人に賣ると、他所に旅行して、行家に就きて賣ると、兩様の價を勘辨して（參酌しての意——筆者）、其價より少し貴く買取るも、多くの貨物を一所に集めて、江戸大阪の如き都會に送りて、府庫に藏し置きて、時價の貴き時に賣り出さば、國民の私に賣るよりも、其利多かるべし、國民は旅行の勞もなく、前に云へる所の諸股の費もなく、商人に賣るより、利多きを喜ぶ』のである。

以上の如く藩の專賣は、領主にも領民にも共に利益あるものであるが、『諸侯として市價の利を求むるは、國家を治むる上策にはあらねども、當時の急を救ふ一術』であるから、仕法の宜しきを得べきは勿論であつて、若し領主の地位を利用して『國民の私に賣るよりも、價を賤く買はん』とせば、民悦ばずして、貨物を匿し、潜に私賣すべし』と論じてゐる。蓋し、諸藩の專賣に於て、買上價格を低くし、或は諸物價騰貴の傾向あるにも拘らず、買上價格を長く固定して、領民の怨嗟を買ひし例あるを見れば、春臺の此の最後の一言は、よく事情を洞察したものといはなければならぬ。

## 二 海保青陵

海保青陵の專賣論は『稽古談』に見られる。青陵が主として説くところは、丹波園部藩の『多葉粉』專賣の例である。之れは領内の煙草を悉く買上げて京都の屋敷で賣捌きしものであつて、此の仕法は、小濱藩及彦根藩がやはり國産を京都の屋敷にて賣捌きし例に倣へるものとせられてゐるから、此の兩藩に於ても既に一種の專賣制度を行ひしものであらう。又青陵が

大阪に於ける『産物廻し』の例として擧ぐる所の『長州の蠟・紙、藝州の紙、豊後の多葉粉・鉛』等も專賣商品なる事が窺はれる。

扱右の如く、領内の産物を藩が一手に買上げて賣捌く時は、問屋との關係が主客顛倒する事となり、従つて價格決定上甚だ有利となる。即ち青陵曰く、『園部藩の煙草』今までは百姓の納屋物なれば、問屋へ持出しても、此方より頼みて買て貰たるなり、この方より頼みて買てもらふては權は問屋に有り、これを客の勢と云ふなり。今度は屋しきうりさはきのことなれば、仲買を呼寄せて、此方でうりてやると云ものなり、仲買も何卒うりて下されと云ゆへに、權はこの方にあり、是を主勢と云、相場は此方にて立ると云ものなり、(中略)先最初より園部大きに利を得たり』云々。前述の太宰春臺は、生産者各自が賣捌く時は、商人に乗せられて價格は思ひ通りに定まらなといと説きしのみであるが、青陵は之に一步を進めて領主の價格決定上の優位をも説くのである。かくの如く領内産物を領主の專賣に委ぬれば、領主は賣買そのものより利益を受くるのであるが、他方生産に従事する領民にとつても大いなる利益がある。即ち販路確實となり、従つて領主も其生産を奨励する結果、産額増加を招來することゝなる。『園部なども百姓面白がりて、力にまかせて出したるゆへに、産物昔とは何雙倍もふえた』と青陵は述べてゐる。

藩營專賣はかくの如く領主領民共に利益を受くる結果となるのであるが、この領主の商業行爲に對して青陵の懷きし考は、徳川時代の經濟思想の中にあつて頗る異彩あるものであらう。太宰春臺が領主の商業行爲は一の權道なりと説くに反し、彼は之を正道として論じて居る。曰く『古

1) 日本經濟叢書、卷十八、221頁、尙ほ、瀧本博士「日本封建經濟史」220頁參照  
2) 同上、220頁  
3) 同上、221頁



へより君臣は市道なりと云なり、臣へ知行をやりて働かず、臣はちからを君へうりて米をとる、君は臣をかい、臣は君へうりて、うりかいなり、うりかいがよきなり、うりかいがあしきことにてはなし、凡そうりかいのことは、君子のすることでない云は、皆孔子の利をいどふことを丸のみにして、のみそこなふたるなり<sup>4)</sup>云々と。先づ君臣關係をも賣買を以て説明し、次で孔孟の教は亂世を救ふに役立つべきも、治平の策に非ず、徳川時代の如き平和時代の統治策としては、支那の同じく平和時代である周代の周禮其他に據るべき事を論じて、經濟政策の相對性を主張し、周禮の法は利をとる法なりと述べてゐる。更に徳川時代に於ても領主が實際上賣買に携はり乍ら之を意識せざる不明を指摘し、『物をうるることなければ、かふことなき筈なり、(中略)武士は物を賣ぬものと云ふこと、をかしきことなり、貧になる證據なり、物を買ふ金は何から出たるものなりや、一體事の理を責て見ぬこと甚しきなり、武士は物を買ふことは辱とせず、物を賣ことを大恥辱とすること、かたかしぎのことなり。(中略)武士は米を貰ふゆへに米をうるなり、大名は濱を賣、田畠をうり、米をうり、國産をうるなり、何も賣ることが恥辱なることもなきことなり、武士は物を賣ぬものとするゆへに、國中にしるものふへぬなり<sup>5)</sup>云々と。即ち領主其他武士階級のもの、知行米・祿米の賣却を行つて居ながら、賣買行爲を賤しむのは明かに矛盾であつて、これが爲めに貧窮に陥るのである、宜しく積極的に賣買に携はつて貧窮を脱すべし、と論するのであつて、領主の商業行爲を是認する論據としては、誠に有力なるものである。而て彼が、武士階級<sup>6)</sup>のものが『阿蘭陀の國王が商ひをすると云て、ドツと云ふてわらふ』のは誤りであると言へる言

4) 同上、195頁  
5) 同上、217, 218頁

葉は、彼が西洋に關する知識を或程度まで具へたりし事を窺はしむるものであらう。

要するに海保青陵は、進展し來れる貨幣經濟の社會に支配階級の順應すべき事を強調せるものであつて、封建時代の思想に固有の農本主義を脱却せるものといはなければならない。

三 林子平、其他 專賣獎勵に關する意見は、以上の兩者が代表的のものであり、從つて專賣制度の思想的根據並に該制度の利點は大體窺ひ得るが、尙ほ補論として、かゝる制度を主張せるもの、又は專賣制度の主張とは稱し難きも領主の商業行爲を是認せるものの二三を擧げよう。

先づ林子平は、天明元年仙臺侯に奉りし「上書」に於て漆・桑・楮の栽培を獎勵すべき事を説き、この三木を主要國產に取立て、而て『都て產物は薩摩の國產の如く仕立候が宜く奉存候』とて、鹿兒島藩の國產專賣を叙してゐる。曰く、『まづ薩摩一手より出候て日本中へ行渡り候物は、樟腦・砂糖・七島表にて御座候、樟腦は年々十四五万斤づ、製し申候、此内七萬斤程は定り候て阿蘭陀へ賣渡し、二万斤程は唐へ賣渡申候、殘六七万斤を日本中へ渡し申候、大概一斤に付三匁位に賣渡し候故、十五万斤にて八千兩程に御座候、黑砂糖は大概一ケ年に百二十斤入六萬樽程の賣方に御座候、此内二萬樽程は年貢に納り候品にて、四萬樽は御買上に被成置、商人共の手に懸け不申、直に國主の御賣渡し物に御座候、大概一斤に付七分位の御賣方故、一樽八十匁位と積り候て、六萬樽にて四千八百貫目、此金八万兩に御座候、七島表も大概年々百萬枚位と承り申候、是を上中下平均六分の御拂と見候て一万兩に御座候』と。

彼は進んで、支那へ輸出する俵物（煮海鼠・乾鮑等）が長崎の富商十人の一手に取扱はれ、其利

益の莫大なるを見て『右俵物は十人組の手を除き候て、國主々々より長崎へ直送りに被成置候て、長崎に於て大公儀の御藏へ御賣被成置候得ば、大公儀にも御益有之、其國々にも大に益ある事に御座候』と述べ、商人の排除を論じてゐる。

尤も彼は、國產の專賣によつて、專賣商品の生産にまで干渉すべきものに非ずとなす者なる事は、他の上書によつて知り得る所であつて、只商人を排除する事によつて、領主領民共に利を得べき事を説けるものである。思ふに徳川時代に共通なる商人憎惡の思想の一面として專賣を説けるものであらう。

同じく仙臺侯によりし蘆野東山の上書(年代不詳)にも、林子平と同様の意見が窺はれる。即ち彼は漆木の實を買上にすべしと説くのであつて、其根據はやはり商人を排除すれば領主領民共に利益を受くるとするにあるが如く、『山海并總而御國之產物不寄何、格別下直に相成候得ば、其筋渡世之者苦申儀御座候得者、是又相應の値段に御買上被成、江戸爲登又は他所商人持參仕候諸色へ、代物等に被成下、右諸色は御買上物の値段を以、商人共へ向々配分被成下可然奉存候、左候は、商人共乍居其を食候儀不相叶』云々と述べてゐる。

岡本信克が其著「治本策」(年代不詳)に於て、領主自ら商人に伍して米を商ひ、以て米商が擅に米價を定めて暴利を貪るを制肘すべしと説くも、亦かゝる思想に基くものであらう。

最後に、前述せる海保青陵と同様の思想的根據に立ちて、領主の商業行爲を説くものに、仙臺藩儒畑中太冲がある。其著「貨殖論」(天明三年)に曰く、『聖人も富を惡むには無之候、因て論語

7) 日本經濟叢書、卷十五、20頁

8) 同上、21頁

9) 日本經濟叢書、卷八、508頁

10) 同上、卷二十六、117頁

11) 同上、卷十二、523頁

12) 同上、卷三十二、523頁

にも富と貴とは人の欲する所也、道を以てせざるはをらずと申、而るに（中略）後世の學士手前は疎懶にて、貨の生ずる道を不知、剩へ金持なるを短く、金錢は賤き物也、利をとる事は君子のせざる所也、貧は固より好む所也、抔と申は、片腹痛き義にて候<sup>13)</sup>と論じて領主は金融をも行ふべきを説き、商業に就ては、仙臺藩の如きは、重要國產なる米・鹽・鐵・魚の四品を安く買上げて他國に廻し、以て利用厚生を行ふべしと述べてゐる。而て此の四品の他は、『利をえても少しなる事にて、目にかくるに足らず、大方商人の手に落ちて、君子の世を治るの利に非ず』<sup>14)</sup>と言へるより考ふれば、重要ならざる產物は商人に委ね、重要なものは領主の專賣にして利益を上げ、以て國用に供すべしとあるが如くである。

以上專賣獎勵論者の見解は、當時此制度に依つて莫大なる利潤を擧げつゝありし諸藩の商業行為を、事實上思想上の根據に基いて正當視し、此制度を行ふ事に依つて勃興し來れる町人階級を抑制し、藩財政の基礎を鞏固にし、併せて民業を盛んにすべしとあるにある。

### 三 專賣廢止に關する意見

專賣制度は以上の論者が説く如く、一面民業の振興、他面領主の財政救済に資する所が多かつた。然し最初にも述べし如く、財政上の顧慮に偏し利益の追窮に急となりし場合には、民業を壓迫して生産力を減退せしむるが如き結果となつた場合が少くない。即ち買上價格を永く固定し、或は買上のために藩札を濫發して貨幣の購買力を減退せしめし場合の如き、特に然りである。生

13) 同上、卷十一、530、531頁  
14) 同上、533

産力が減退すれば、藩の利益は減少する事となり、之を防止する爲めに益々民業を壓迫する結果となつて、此處に一揆或は逃散を勃發せしめたのである。

專賣制度のかゝる弊害を目撃せるものは、或は專賣制度の廢止を唱へ、或は制度の改良を主張した。而てこの後者は原則として或は財政上已むを得ずとして、專賣制度を肯定するもので、所謂改良とは制度の運用に關するものであるから此處には之を省略し、專賣獎勵に關する意見と對比する意味に於て前者のみにつき述ぶる事とする。

一 玉虫十藏 仙臺藩士玉虫十藏は、天明四年藩主へ呈出した意見書「仁政篇」に於て買米制度の廢止を主張してゐる。買米とは、農民貢米の殘餘を悉く藩に買上げ、貢米と共に之を江戸の藩庫に輸送して賣捌く一種の米の專賣である。十藏は先づ此の制度の弊害を論じて曰く、

『御買米之義前々々御座候得共、第一御直段時惣場に無之格別下直に被相立候故、諸民先以痛に罷成相服不申、其上近來百姓共困窮に罷成、御買米上納差滞候故、大肝入肝入方に而百姓共諸上納振替堪定に仕、御買金指引被仕候故、右金百姓共之手に相入候義無之、其年之暮御買米上納不仕、翌春に罷成直段引上候時節に至り右米御取立に罷成候故、其節の値段を以金納に仕何升上りと申に而取立候間、百姓共最初金子手取不申上に惣場の上候而莫大の損毛に罷成、夫喰給時節故猶更上納指滞候に付、徒者々役等理不盡に責はたり其内には繩懸も多く相出、家財雜具も賣拂候様に罷成、夫にても不引足故、近郡近村の親類共迄辨納割付無體に取立候故、百姓共困苦可申様無之、右役共并肝入組頭等御用にて翔廻り候と申方々日用代并賄代酒代等迄も高割を以取立候様に相至

1) 土屋喬雄氏、封建社會崩壞過程の研究、630頁以下參照

諸懸諸償年増に多く罷成、遂には百姓相續成兼地逃沽却數多相出、田地相捨候根元に罷成候<sup>2)</sup>云々と。即ち第一買上價格が低い。而て農民の困窮に乗じて買上に携る役人の非理私曲が行はれ、彼等は愈々困窮に陥つてゐる。要するに農民困窮の根本原因は買上制度にある、といふのである。されば農民の困窮を救ふ爲には買上を廢止し、貢米の殘餘のみならず、藩主の支配に屬する『御藏入并給所前』をも『一式商人買自由に被相明、他領出し勝手次第<sup>3)</sup>』にすべきである。然らば、『御領分中の米商人殊の外悦候而面々金を盡し米買方仕、他領出し可仕候に付、何程豐作に而も御領米下直に罷成候義無之、御藏米は右之通値段宜被相拂候上、津方御境に而御役被召上候得ば、御藏前は二重に御利潤被召上、給所并百姓共に何方にても右御役を以御利潤不殘被召上御利益に<sup>4)</sup>』なると述べてゐる。即ち米の賣買を米商の一手に委ねたならば米價騰貴し、御藏米拂下も有利となり、又米商人のみならず、農民にも運上を課する事によつて更に利益を得、藩の財政は十分に補ひ得るといふのである。米價騰貴の結果農民にも利があると考へた事は勿論であらう。

運上徴收は玉虫十藏の極力主張する所である。右の米商に對する運上は石卷・荒濱等の輸出港のみならず、國境にあつても苟も領外に米を搬出する所には悉く問屋（問屋とは運上所又は會所の意であらう―筆者）を設置して運上即ち輸出税を賦課すべしとするのであつて、國產の振興、輸入の防遏を説く他の箇所<sup>5)</sup>に於ても、國產を輸出する者は豫め國產會所へ願出て指揮を仰ぎ、輸出品に對しては運上を課すべしと述べてゐる。

以上の如く玉虫十藏は、總ての產物を商人の自由賣買に委ね、以て藩の專賣による民業の壓迫

2) 近世社會經濟叢書、卷五、12頁  
3) 同上、10頁  
4) 同上、11頁

を緩和し、又藩は商人を統制して運上を課し、米の如きは農民にも之を課し、以て財政收入を計るべしと論ずるのである。即ち商品配給上に於ける商人の重要性を認め、その存在が生産業者をも有利に導く事を説けるものであつて、更に運上に對する觀念に至つては、前述の太宰春臺と根本的に異なるものがある。右の商業自由の見解を更に敷衍せるものは、同く仙臺藩士櫻田廸である。

二 櫻田 廸 櫻田廸は天保五年仙臺藩の有司に呈出せる意見書「可驗錄」に於て、專賣制度の廢止を論じて居る。先づ一般的に諸藩が國產の專賣を行ふことの弊害を論じて曰く、

『今の諸侯に田野辟け五穀多きか、海濱廣漠にして漁獵多き歟、鹽濱あるか、山林多くして伐木薪炭澤山なる處にては、民より買上又は運上を取立、これを役所にて或は國中に商ひ、或は他邦へ交易し利を得て一家の經濟となし、農商の交易を許さざることあり。これ全く年貢賦税と云ものにあらず。國中の利あるものを壟斷を私して利を罔するの大なるものなり。故に國中の利は上にて取らるゝ故、國にぎやはず、豪農富商と云ものなくして國の衰ること全くこゝにあり』。

と。即ち領主の私利のために國產の買上を行ふは國を富ます所以でないとするのである。續いて彼は『余嘗て或大國にて農民より米を買取商ひせられ、鹽濱より鹽を買上げて國中へ高値に商はるゝを見て深く憂へ』、と稱して暗に仙臺藩の米及鹽の專賣を指し、專賣制度は財政上止むを得ざるに出たるものなれば一朝にして廢止すべからずと論ずるものを、國家永遠の策を知らない、一を知つて二を知らない議論であると駁してゐる。彼の議論の事實上の根據は買米による農民の疲弊を目撃せしにあるが如く、

『夫米の相場は農商相對の相場買上の相場と同じにしても買上は農民に甚しき損あり。如何となれば買上は相對賣と違ひ米の性合より米の拵樣俵の作り方迄精撰し、其上口米とて定法の升めの外にさし米あり、加之に運送の勞役あれば、相對に比すれば多くの費ありて大なる不利なり。此がために困窮して逃亡分散するに至るもの年々にあり』。

と述べてゐる。之に依て見れば仙臺藩は貢米の殘餘を買上ぐるに際し、貢米同上に米を吟味し、口米をも課せしものの如くである。

而て彼の專賣廢止論の思想上の根據は、上述の如く民の富即君の富にあるのであつて、即曰く、『若し國の產物を商人に自在に交易せしめこれが法を定め物價高直ならぬ様に世話をなせば、國中の萬物通用よろしき故、前に云如く商に大商あり、農に豪農あり財寶處々に散じて自然と他國他郷よりもこれが農民となり商旅となるを願もの多くありて、地僻け石物も價高くなりて富國となること必せり。果して然るときは目前の藏入はすくなくとも、國中の財此迄に倍して國に急あり變あるときは其財を以て給すること當然のことなるべし。孟子に百姓不足君誰ととも足んとあるはこのことなり。余が私論にあらざるなり。然るに今彼國(仙臺藩—筆者)五穀の下直なるにより士困窮し民くるしみ、自然世の中不景氣にて商ひ少くして一國不繁昌なり』。

と。而て財政の一時の窮乏の如きは『公務及城廓武備祭祀音信贈答』の如きものの費用を節減する事によつて容易に救済し得るとするのである。

要するに、櫻田廸の見解は國民の富を以て一國富強の基礎であるとなし、之を侵害する君主の



專賣の如きは宜しく廢止すべしといふにある。前述の玉虫十藏と異り、運上の賦課をも否定するものの如くであるが、民間商業の自由を主張する點に於ては兩者相一致するものがある。但し此處に注意すべきは、豪農富商の存在を以て國民の富形成の主要條件とする事である。彼等の存在によつて生ずる土地生産物の増加、財貨流通の殷盛、之れ即ち彼の眼に一國の繁昌として映じたところであつて、その存在がやがては農民の貧窮、領主財政の窮乏となり、延ては封建社會存立の基礎を危くするに至る事をば見逃がせしものといはなければならない。

以上專賣廢止論者の見解は、藩の專賣によつて民間の取引は不活潑となり生産業も萎縮せる實情を目撃せるに基き、町人階級の勃興を自由に任せて所謂國富を興すべしとするのであつて、或意味に於ては、專賣獎勵論者のいはゞ官房學の見解よりも一步進んだものとも見らるゝであらう。

## 四 結 論

以上徳川時代諸藩に行はれし專賣制度に關する賛否兩様の意見を瞥見した。廢止に關する意見は仙臺藩の買米制度を中心とするものに限られ、他藩のそれに關するものを見得ざりしを遺憾とするも、大體に於て、特に櫻田廼の述ぶる所を以て、廢止に關する意見を代表せしめ得ると思ふ。依つて簡單に双方の見解を吟味しよう。

先づ民業に對する觀念を見るに、其の振興が國富の基礎をなすとする點に於ては兩者相一致する。然し專賣獎勵論者は封建領主の保護獎勵、具體的に云へば民業の生産物の販路を領主の權力

によつて確保する事がその前提條件であるとするに反し、廢止論者は民間の自由專賣が前提條件であるとする點に於て、兩者全く相反する。この相違は、彼等の目撃せし專賣制度が、一は民業の振興に資し、他は民業を壓迫せしに起因するものであつて、いはゞ專賣制度の時代の相違ともいふべきであらう。蓋し一個の專賣に就ても、その初期に於ては生産物の急激なる増加を招致せしも、後に至り却つて民業の桎梏となりし場合が多く見らるゝからである。

之に對し、商業利潤に就ては、兩者全く別個の觀念を懷きしものの如くである。廢止論者が君主が利を爭ふは小人のわざであるとの孟子流の教を信奉し、聖人たる領主は利益獲得行爲に携はるべからずとするに對し、獎勵論者は少くとも商人の利と君主の利とは異なるものであるとして、商人を排し或は抑制して、領主自ら商業利潤を獲得すべき事を説くものである。此の領主の利と商人の利とを區別せしは、領主の商業行爲は、賤しむべき民間の商業行爲とは別個のものであるとの舊式思想に捉はれたものであるが、海保青陵に至つては此の區別をも認めず、貨幣經濟の世の中にあつて商業利潤の獲得に携はらざるの愚を指摘して、領主の商業を極力主張せるものである。

此の商業利潤に對する見解の相違は、貨幣經濟の著しく進展せる封建制度の下に於ける藩財政の見方の相違に歸せられるであらう。即ち專賣獎勵論者の見解はあくまで領主本位の財政政策を主張するものなるも、貨幣經濟に順應して收入を計らざるべからずとする點に於てはよく時代の傾向を洞察せるものといはなければならない。之に反して專賣制度の廢止論者は此の事情を無視

し、或は重要視せず、玉虫十藏は運上を以て唯一の歳入填補の方便であるとし、櫻田廼の如きに至つては、運上をも非として、儉約を以て財政の窮乏を脱し得べしとさへ考へて居るのである。されば廢止論者は、民富めば君富むてふ漠然たる財政觀を固持し、國民の富形成の前提條件として豪農富商の存在をも認むるのであつて、一部領民の富有と藩財政との間に背馳の生すべき事を看過せしものといはねばならぬ。

従つて、專賣制度獎勵論者の見解は、貨幣經濟の發達を認め、之に順應する財政政策を行ふ事に依つて封建領主の地位を確保しようとするにある。之に反し廢止論者の見解は、貨幣經濟に順應する財政政策の樹立には想到せず、従つて封建制度の斯る狀態に卽した經濟論としては幼稚なるものと言はねばならぬ。尤も後者の見解が結果に於ては經濟上の權力者なる豪農富商の擁護論である點よりすれば、前者がいはゞ官房學の見解なるに對して、一步を進めたいはゞ自由主義の見解なりとも考へられる。然し積極的に封建制度崩壞の過程を認識し、以て商業自由の原則を主張せしに非ざるものなる以上、やはり孟子流の理想論に過ぎないと考へるのが至當であらう。

事實、廢止論者の見解の如き政策は容易に行はれず、仙臺藩の某(土屋氏によれば蘆東山であるといふ)が、寶曆四年藩侯に奉りし上言に、『當時細民困窮に至り、農業の妨げに相成候儀は、御買米に御座候、乍去御買米相止められ候ては、第一御繰合の御指支、次には御領内の米穀賣所無之、諸上納可仕様無之故、不得止の御事に奉存候』と嘆じた様に、諸藩は止むを得ざる財政救済策として盛に專賣を行ひ、以て封建制度の維持を計りしものである。